

# 西日本豪雨から4年 広島の被災寺院・門徒を訪ねて

北海道から本州、四国、九州まで広範囲に被害を及ぼし、死者263人を出した西日本豪雨(平成30年7月豪雨)から4年。被災地では多くの人が、さまざまなかたちで、平穏な生活や故郷の景色を奪われた悲しみを抱えてきた。集中豪雨による川の増水で寺の名前を冠した橋が流失した寺院と、被災当時の心境や支援に訪れたボランティアへの思いを詠んだ歌を歌集にまとめた門徒を訪ねるため、広島県に向かった。



## 江戸時代、寺参りのために架けられた 流失した真光寺橋が再建

呉市広地区

広島県呉市広地区。今年7月、豪雨で流失した橋が4年を経て再建された(写真)。

橋は二級河川の黒瀬川にかかる、幅約4.5m、全長100m超の歩行者専用の「真光寺橋」。約170年前の江戸時代後期、近くの真光寺(冷泉彰太住職)に参るために架けられたと伝わる。木造での改修や架け替えが行われてきており、木組みの欄干など情緒ある造りが京都嵐山の渡月橋を思わせる。真光寺門徒や地元の人に愛されてきたが、4年前の豪雨で橋脚ごと流失した。

橋は市が管理しており、「寺にも文献が残っていないので詳しい由来はわからない」と話すのは冷泉住職(32)。この地域は数十年おきに大きな水害に遭っており、昭和20年9月の枕崎台風で寺の土蔵が流失した際に古い資料も流失されたという。

再建された真光寺橋は、以前と同じ場所に架けられ、橋脚は強度の低いコンクリート製の橋ができたお寺に行き、主桁も災害に備えたい」とおっしゃる。木製から鉄鋼製に替えたが、以前の趣を残すため外観は杉材で覆われた。

同寺役員で、橋のすぐ近くで生まれ育った小迫勉さん(75)は「白魚やシジミをとったに、一層お寺を盛り立てたい」と語った。

冷泉住職は「川向こうに住む高齢の門徒の中には、数キロも迂回しては参ることができず、『また真光寺の橋ができたからお寺に行きたい』とおっしゃる方もおられた。この地域にもまだ災害の爪痕が残っているが、橋の再建が一つの復興の兆しとなれば。昔のようにこの橋を渡ってお寺を参ってもらえるようになりたい」と語った。

自宅から一段低い納屋は2.5m以上浸水した。土壁が落ちたままになっている



## 床上約1.2mまでの浸水被害

### 復興の歩みとして歌集を刊行

三原市本郷南地区・山原淑恵さん

「眠れ眠れ朝は来るから泥匂う真つ暗闇の二階に逃れ」  
「傷つきし子を打つごとし泥まみれのピアノが一気に潰されてゆへ」  
「照りつける屋根に上りて瓦剥く若者汗の滴るまほし」

西日本豪雨で自宅1階が水に浸かった広島県三原市本郷南地区の山原淑恵さん(77、寂靜寺門徒)は今年1月、自らの復興の歩みとして、2冊目の歌集『菜感謝など、当時の心境



を詠んだ45首を約500首と納めた。山原さん宅は4年前の豪雨で近くの梨和川が決壊し、自宅の床上約1.2mまで浸水した。淑恵さんと夫・正樹さん(83)は2階に逃れたが、水は3日経っても引かず、ようやく1階に足を踏み入れた時には、家財は散乱し、大切にしていたタンスや嫁いだ娘が残っていたピアノも茶色くなっていた。地域の消防署も浸水。周囲の被害状況も救援情報も届かず、夫妻は孤立した状態で家の中を細々と片付けながら何日も過ごした。

「わずかな食料があるだけ。水も電気も3週間近く不通で、夫は休耕田に流れ込む水を

「『残った命でまた新しい歌集を出しましょ。頑張ら』と。40代の女性で初対面の方の支えもあって再びだったけど、その力強き言葉に『そうだ、その歩みを進める淑恵さんうだ』って。心の中では『あのボランティアを向かなければ』という葛藤があったけれど、私はその言葉に救われた」と淑恵さんは

い頃からの遊び場だった。昔は寺の法要前に地域の人が川べりの草を刈ったり、車の多くない時代は皆さんがぞろぞろと橋を渡って寺に参ってこられていたのを覚えている。それだけに、橋が流れたと知った時は涙が出た」と振り返りつつ、「歩行者専用の橋なので、用途だけを考えれば今

の時代にはそれほど必要はなかったのかもしれないが、私たちの生活に根付いた大切な橋を元に近い姿で再建しようという思いが、今の人の中にあつたことがうれしい」と話した。

冷泉住職は「川向こうに住む高齢の門徒の中には、数キロも迂回しては参ることができず、『また真光寺の橋ができたからお寺に行きたい』とおっしゃる方もおられた。この地域にもまだ災害の爪痕が残っているが、橋の再建が一つの復興の兆しとなれば。昔のようにこの橋を渡ってお寺を参ってもらえるようになりたい」と語った。